

令和5年度版

愛えがお顔



感動ものがたり

「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

愛媛県



銀行を、 人に合うかたちへ 変えていく。

お金に向き合うことは、お金の先にいる人に向き合うこと。
 だからこそ私たちは、デジタルを取り入れ変革を進めています。
 心地よく、使いやすい、人にとってより自然な存在になれるように。
 どこからでも、つながる。手のひらで、お手続きできる。
 将来の計画を、プロとつくれる。悩みを、もっと分かち合える。
 いま、着実にそれらを実現しています。
 私たちはきっと、ずっと、こんな銀行になりたかった。

Better Money,
Better Life.





世界一の
ロボットをつくる！
八幡浜工業高校
電気技術部



日本一の
書道部になる
三島高校書道部



憧れを与える
クライマーになる
真鍋 竜



日本を引っ張る
車いすバスケット
プレイヤーになる
渡辺 将斗



世界に通用する
溶接の
スペシャリストになる
村井 珠夏

ひめぎんは、
ゆめぎん。
みんなの夢を応援します。

愛顔^{えがお}とは？

人と人との助け合い、

支え合いの根底にある「愛」と、

困難にくじけることなく挑戦し、

道が開けた時にこぼれる「笑顔」が

結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛顔^{えがお}あふれる愛媛県」を

目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔」を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図るために実施しているもので、今回で10回目を迎えます。10年の間に寄せられた作品は8万6,044点にも上り、本事業が広く定着しておりますことを、大変うれしく思っています。

さて、今年度は、エピソード部門に、46都道府県と2か国から3,933作品、写真部門には、39都道府県と1か国から5,133作品の応募をいただき、受賞作品の選考に当たっては、審査委員長である俳優の伊ッセー尾形さん、俳優の神野紗希さん、そして私が最終審査を行ったほか、写真部門については、愛媛県美術会の方々にも御協力を賜りました。

知事賞をはじめとする各賞に選ばれました皆さん、誠におめでとうございます。拝見した作品は、どれも「愛顔」と「感動」が詰まった力作ぞろいで、選考には大変苦勞いたしました。中でも、エピソード部門で知事賞に輝いた二つの作品は、妊娠中に出会ったタクシー運転手の気遣いとその際に作者が見た風景、幼少時に母を亡くした作者が高校生になり初めて知った母の思いがえがかれた心温まるものがたりで、胸を打たれました。

今年度の受賞作品をまとめた本作品集を多くの方々に御覧いただくことで、たくさん「愛顔」が生まれ、その輪が全国に大きく広がることを切に願っております。

終わりに、応募いただきました方々をはじめ、本事業に御協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」(一般の部)

「知事賞」	回り道	城戸	美佐	(愛媛県)	8
「特別賞」	いつでもどこでも	箱田	香奈子	(大阪府)	10
「優秀賞」	まっちゃん	鹿島	由美	(大阪府)	12
	今は昔、君から届いたラブレター	来住	裕志	(東京都)	13
	美術室の窓	倉田	久子	(愛知県)	14
「入選」	母のくちぐせ	坂本	ユミ子	(兵庫県)	15
	無機質なコンビニが変わるとき	原	稔宏	(徳島県)	16
	帰ったか!!	藤田	義明	(大阪府)	17
	ネギの匂い	三好	佳奈	(京都府)	18
	ばあちゃんの手のぬくもり	矢野	三代子	(愛媛県)	19
「佳作」	姉の愛顔	入船	梓	(愛媛県)	20
	伝説のキャプテン	尾木	直子	(滋賀県)	21
	藤棚の下で	木村	敬子	(滋賀県)	22
	愛顔を呼んだ愛情弁当	後藤	里奈	(東京都)	23
	最後のプレゼント	醍醐	恒子	(広島県)	24
	命のおすそ分け	巽	久美子	(神奈川県)	25
	運転お疲れさま	豊	恵子	(石川県)	26
	山漢の賛歌	藤原	奈々	(愛媛県)	27
	一輪の愛顔	本田	美徳	(大阪府)	28
	朝顔	横川	容子	(埼玉県)	29

「エピソード部門」(高校生以下の部)

「知事賞」 未来のノート

「特別賞」 父の誕生日プレゼント

「優秀賞」 四つ葉のクローバー

しりとり続き

小さな神様と私

「入選」 バトンを繋ぐ

恐竜の鉛筆

甘いトマト

大好きなじいじへ

家族

越智 亮介 (愛媛県)

池内 沙藍 (愛媛県)

竹内 維吹 (愛媛県)

御手洗 彰彦 (愛媛県)

森田 帆南 (愛媛県)

上松 心菜 (愛媛県)

菊池 ルミナ (愛媛県)

田中 敦稀 (愛媛県)

藤澤 明 (愛媛県)

二神 あい (愛媛県)

32

34

36

37

38

39

40

41

42

43

「写真部門」

「一般の部」

「知事賞」 歯磨きたのしいな☆

「特別賞」 いらないないばあ

「河原学園賞」 大好きな君の隣で

「優秀賞」 新しい家族楽しみだね

畑が好きな96歳です。

ピースとかくれんぼ

キレイな花だね

ボクだけ起きてるよ

俺の妹

古民家の秋

虫取り探検

松本 忠義 (大阪府)

清家 綺麗 (愛媛県)

大熊 あゆみ (愛媛県)

林 良子 (山口県)

徳永 康人 (和歌山県)

中川 雄喜 (愛媛県)

須賀 杏奈 (愛媛県)

山崎 篤 (愛媛県)

青井 恵 (愛媛県)

白石 信夫 (愛媛県)

秋山 叶夢 (愛媛県)

46

46

46

47

47

47

47

48

48

48

48

『小・中・高校生の部』

- 「知事賞」 最高の笑顔
- 「特別賞」 WINNER!
- 「河原学園賞」 あなたを癒し隊

福田 優羽 (東京都) 49
 乾 颯真 (愛知県) 49
 赤沼 奏空 (愛知県) 49

『一般の部』

- 「愛媛県商工会議所連合会賞」 お家カラオケ
- 「愛媛広告協会賞」 親子共演 秋祭り

神野 朝春 (愛媛県) 50
 濱本 秀雄 (愛媛県) 50

『小・中・高校生の部』

- 「愛媛県IT推進協会賞」 わたしの居場所
- 「愛媛経済同友会賞」 覚えているよ
- 「愛媛県歯科医師会賞」

安藤 野々花 (愛知県) 50
 加藤 陽花 (宮城県) 50

- 「愛媛県獣医師会賞」 君の記憶には残らないけど
- 「愛媛県情報サービス産業協議会賞」

中川 美希 (京都府) 51
 竹野 陽向子 (愛知県) 51

- 「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」

窪田 宜久 (愛媛県) 51
 川井 実咲 (神奈川県) 51

「エピソード部門」一般の部

「知事賞」

回り道

城戸 美佐（愛媛県）

その日は朝から倦怠感が酷く、体温測定したら三十八度だった。またか、と思った。

私は妊娠九か月。結婚して二回流産し、三回目の今回も不正出血や悪阻など、体調不良が続いた。心配で病院受診することにした。

私は車を持っておらず、バス停留所も歩いていくには遠かった。その為、新谷タクシーをお願いした。すぐ迎えに来られ、運転手さんは「一番近い道を通っていくからね。」と言われた。丁寧な運転で病院に到着できた。

受診では赤ちゃんの異常もなく、ほっと一安心した。点滴で随分楽になり、抗生剤の処方を受け取った。再度新谷タクシーに帰りのご連絡をした。

思ったより迎えのタクシーは早かった。その時、「帰り道は来た道と違っても大丈夫？」と聞かれた。私は「お任せします。」と答えた。

タクシーは病院を出て、割とすぐ左折した。裏道だろうか。結婚してこの町に来てまだ一年半。通ったことのない道だった。春の霞んだ空が窓から見えた。いつの間に春が来たのだろうか。妊娠してから一日一日を数えるように過ごしてきたのに、突然あつという間に今になったような錯覚を覚えた。

その時、私の目の前に黄色い絨毯が飛び込んできた。それは川のそばに一面に広がっていた。一齐に太陽の方に顔を向けて勢いよくキラキラ咲いている。菜の花だ。菜の花畑だ。その美しさに私は思わず感嘆の声を上げた。

運転手さんは「五郎の菜の花畑よ。今、最高にきれいやけんね。少しでも気晴らしになったらええと思って。」そしてメーターを切り私に言った。「朝、病院まで一番近い距離で走ったから、料金はわかる。帰りは少しだけ距離が長くなるけど、自分で選んだ道だから。朝の金額でお願いします。」

あれから二十二年。春になると心の写メで切り取った菜の花の風景と、広くふかふかの心で接して下さった運転手さんのことを昨日の事のように、鮮やかに思い出す。

「特別賞」

いひどもぶひども

箱田 香奈子（大阪府）

「ドアが開きまーす」「ドアが閉まりまーす」

15年前。当時3歳の息子は、バスや電車が大好きだった。特に、このドアの開閉の際のフレーズを気に入り、家ではお風呂のドアをそれらに見立てて、毎日のようにごっこ遊びを楽しんでいた。あまりにも長時間続けるので、「もー！ドア壊れるやろー！」と何度叫んだことか。

私の実家に遊びに行くと、それが行われるのはお風呂だけではなかった。実家はマンション。そう、エレベーターという願ってもないものがあったのだ。息子は嬉しすぎて舞い上がっていた。乗る度にささっとボタンの前に立ち、背筋をピンと伸ばして例のフレーズを丁寧と言う。車掌というより、もはやエレベーターガールである。

息子が毎日飽きもせずにごっこ遊びを楽しんでいたそんな時、父が突然病に倒れ、天国へと旅立ってしまった。あまりにも急な別れで、夢の

ように感じては、横たわった父の姿に現実を思い知らされ：笑っていても次の瞬間涙が出る：家族皆がそんな状態だった。父が亡くなったのは元日、しかも大安だった。おかげでそれ以来、私は大安に安心することも、仏滅に恐れることもなくなった。お正月ということもあり、親戚も大勢集まってくれてにぎやかだったが、それでも葬儀場の待合室では気が重く、皆静かに過ごしていた。そんな中、あのフレーズが聞こえてきたのである。

「ドアが開きますー」 「ドアが閉まりますー」

「ん？」と声のする方を見ると、なんと父の眠っている棺の小窓をパタンと開閉しながら、息子がいつものごっこ遊びを楽しんでいるではないか。「まじか!？」私は思わず爆笑した。家族も親戚も、あれほど悲しみに打ちひしがれていた母さえも大笑いした。人生で一番悲しい時にも笑わせてくれるとは、子どもってすごい！

棺の中の父も、大好きな孫の愛顔にきつと笑顔になったことだろう。その父の姿を想像するとまた笑える。最後の最後に、またひとつ、父との楽しい思い出を増やしてくれた息子に感謝である。

「優秀賞」

まつしやん

生まれつき「怒り顔」の人もいるけれど、まつしやん（仮名）は、おかめインコのような頬の赤い「笑い顔」の女子だった。「わあ、ええ匂い」「サラの畳やからや」と新設の中学校の柔道場に忍び込んで相撲を取ったり、かねてから目論んでいた給食の「二度食い」を実行したり。一度目は真つ先に、二度目は終了間際に食堂に駆けつける作戦が成功したが、その日のオカズはメルルーサの唐揚げで「マズったワ。カレーの日にすればよかった」と二人で反省した。高松塚古墳が発見されたと知り、見学に行ったものの現場は竹の柵で嚴重に囲われていて、「タダで見せるのが惜しいんや」「ケチやな」と二人で憤慨してジュースを飲んだ。

「かつしやん（私の呼び名）立会い人になってくれる？」
小学六年のとき、まつしやんに頼まれた。クラスの男子Y君と決闘するという。Y君が何か気にさわることをしたらしい。温厚なまつしやんも腹が立つことがあるのかと、「よっしゃ、まかしとき」と請け負ったところ開始直後

鹿島 由美（大阪府）

の前蹴りがY君の股間に決まって、まつしやんの秒殺完勝に終わったのだった。そんなまつしやんが真顔を一度だけ見せたことがある。体育の授業の前、体操服に着がえる際に、「わあ、ツギがあたってる」とクラスの目敏い女子が私のシャツを指差した。母が破れた箇所を繕っていたのである。「何言うてるん。ここにかつしやんのお母さんの愛があるのやんか」私が反応するより早く、まつしやんが私をからかった女子をひた、と見すえた。この時、私はまつしやんの怒りの目を初めて見たのだった。Y君との決闘の時でさえ「笑い顔」でファイトしたのに。その凄い表情のあと、まつしやんはいつもの愛顔を私に向けた。その日の帰り道、二人でたこ焼と回転焼を食べた。五〇年経った今でもなつかしい。

「優秀賞」

今は昔、君から届いたラブレター

来住 裕志（東京都）

今日も夫婦げんかをした。いつものより、かなり激しいやつだ。長い結婚生活を経てきた。妻は戦友であるはずだ。いや、待てよ。私だけの錯覚か？

二人の息子は、社会人デビューを果たし、住宅ローンも一応返した。一戦交えたが、アメリカン・プロレスのように、もう、慣れっこになっているはずだ。とはいえ、うちの妻は、かなり手強い。

理系妻、おそらくは、それを配偶者に持つ者にしか共感してもらえないだろう。中盤から終盤にかけての技の流れは、ほぼ、頭に入っている。事実を積み上げて論証し、それを基に、正論で冷静にキメにくる。時として、レトロスペクティブなデータを持ち出し、急所を的確に突いてくるのだ。長年、一つ屋根の下で暮らしている。弱点を一番理解している妻に抗うことなど、そもそも、無理な話である。とにかく、彼女は弁が立つ。対してこっちは、生粋の文系。それも一時期、ほんの少しだけ流行った程度の社会学部出身である。はなから、勝負はついているのだ。

そんな妻とやり合った後には、決まってすぎる秘密の場所がある。打ちのめされ、よろよろしながら階段を上り、二階の寝室に逃げ込む。いわゆる、ロープ・ブレイクである。クローゼットの扉を開き奥にある引き出しに手を伸ばす。「あった」一通の古びた手紙をまさぐる。妻には、絶対にバレない場所にそれは隠してある。二十九年前の君：当時は婚約者：から届いたラブレターの文面に目を落とす、いつものフレーズを凝視する。「一日でも早く、あなたと一緒に暮らしたいわ」

それまで硬直していた頬が、思わずゆるんだ。しかとうなずき、大きく深呼吸して息を整える。大切な手紙を、元の場所にそっと戻す。そして、君の待つリング（いや、リング）にそそくさと戻っては、大きな声でいつもこう謝るのだ。

「さつきは、ごめんなさい。言いすぎた。悪いのは、僕のほうだよ！」

美術室の窓

倉田 久子（愛知県）

今から十数年前になる。中学校の南校舎に面する細い道が、私の通勤路だった。三階に美術室があり、放課後はここで、次男の所属する美術部が活動していた。残業で帰宅が遅くなった日、自転車を止めて見上げると、開いている窓から息子の姿が見えることがある。窓の前の流しでパレットを洗っているのだ。あ、と心の中で小さく声をあげる。シンクロするのだろうか。息子も私に気づき、あ、と笑顔で小さく手を振る。隣にいた友人が先に気付いて、彼に教えている時もある。息子が視線を落とす、ぱっと顔を綻ばせる。軽く手を挙げた彼に、私も笑って大きめに手を振る。

毎日家で顔を合わせていても、いちいち笑ったりしないのに、なぜだろう。家の外に出ると、会っただけで頬が緩んでしまう。いつもと違う空間で家族に出くわす非日常。それが嬉しくて笑みを作るのだろうか。私が見上げたその時、息子がたまたま窓の前に立っていて、互いに気づくという偶然。私は感謝する。小さな奇跡の瞬間に。

美術部は、息子の卒業後に廃部になった。顧問を引き継ぐ先生がいなかったからだ。彼は、希望を抱いて入学した高校で運動部に入り、部活動中の事故で命を失った。

息子が亡くなって一年、二年、泣きながら南校舎の前を通過して仕事に通った。帰りは必ず自転車を止めて、美術室の閉じられた窓を見上げてしまう。もはや儀式以外の何ものでもない。あの奥で彼は、心洗われる風景や生き生きとした生物たちを描き、仲間と語らい、未来を夢見たのだ。

大切な人が微笑む。ただそれだけで幸せになる。そんなことに今ごろ気づいた。その後転職した私は、もうあの道を通らなくなったが、美術室の窓は今、自分の中にある。十五年と九か月を生き切った息子を想う時、窓は開く。そこに現れる、白いカッターシャツの少年の、ふんわりとした笑顔を反芻しながら私は生きてゆく。再び彼に会える日まで。

「入選」

母のくちぐせ

坂本 ユミ子（兵庫県）

昭和三十四年、父が交通事故で亡くなった時、姉は六歳と四歳、私は二歳だった。母は生命保険の外交員で生計を立て、女手一つで三姉妹を育ててくれた。

子供の頃、母はよくキャラメルを買ってくれた。三姉妹に一箱ずつ手渡ししながら、いつも同じことを言った。

「キャラメルは噛んではいけないよ。舐めるとなかなかくならない。幸せが長く続いたほうがいいからね」

母は「貧乏人の子だくさん」の家庭で育った。三姉妹におもしろ、可笑しく、まるで自慢しているみたいに「貧乏話」をした。その中でキャラメルの話が心に残っていた。

母が子供だった頃、祖父に買ってもらったキャラメル一箱を七人の兄弟姉妹で分けた。一箱に十二粒しか入っていない。母は末っ子だったので、いつも一粒しかもらえなかった。キャラメルを一箱全部一人で食べるのが母の夢だった。

「人生は甘くないけれど、キャラメルは甘い」

母のくちぐせだった。幼かった私は「人生は甘い」とはしよって覚えて母や姉たちに笑われた。

平成八年十二月十五日、母は突然、心筋梗塞で倒れた。

母は集中治療室で絶対安静の状態だった。三姉妹が交代で付き添っていた。私が付き添っているとき、目を覚ました母が聞いた。

「ユミ子はいくつになった？」

「もう三十九。もうすぐ四十——中年へ真っ逆さまだよ」

母は羨ましそうに、

「まだ、三十九。若いね。これから何だって出来るよ」

六十九歳の母に言われると、そんな気がしてくる。

「いろいろ大変なこともあったけれど、あなた達がいてくれたからがんばれた。人生は甘くないけれど——」

母の言葉に私は思わず、

「キャラメルは甘い」

母はパツと花が咲いたように笑った。倒れてから初めて見せた笑顔だった。一週間後の十二月二十九日、母は父の許へ逝った。

出棺の前、最後のお別れするとき、私は母の棺にキャラメルを一箱入れた。

「入選」

無機質なコンビニが変わるとき

原 稔宏（徳島県）

ホテル内のコンビニに入ろうとしたときのことである。十数メートル先のエレベーターからこちらに向かってくる車椅子が目に入った。椅子には、三十代半ばだろうか女性が生か座っており、それを小学生の女の子が押している。

私はコンビニに入る。外はものすごい猛暑で、きつすぎるクーラーの冷風が心地よく、汗を乾かせてくれた。ふとガラス扉に視線を向けると、車椅子がコンビニの入口でじっとしているのが目に止まった。段差があるのではない。コンビニ内が混雑し、入るのに躊躇しているのだ。（ちよっと無理ね）の母親の言葉に、悲しげに頷く娘の様子が見て取れた。

やにわに店員さんがレジボックスから出て、自動ドアにそっと手を添えた。「どうぞ、入ってください」二人を案内、誘導した。

するとレジに並んでいる人以外、商品を一度戻して、すべての人がコンビニから出た。コンビニの陳列と陳列の通路は、車椅子でぎりぎりの幅である。だから、出た。

さらにレジに並んでいる人たちは一つのレジを空け二列から一列に並び替える。それぞれが車椅子が通れるよう空間を作った。全ての人の心が一つになり、コンビニが変わった。

私は外から窓越しに中を眺める。女の子と母親は、飲み物と軽い日用品を数点選び、並んでいないレジの方へと進む。「合計、……円になります。ありがとうございます。たあ」。

親子は、店員さん、レジに一列で並んでくれた人、そして外で待つ私たちにも深々と腰を折り、コンビニから静やかに離れていった。

そのあと、何もなかったかのように入り口から無言の人たちがどっと入り、先ほどよりも混雑した部屋になった。一列のレジがいつもの二列になり、整然と列をなす。みな、だまって商品を選び、レジへと歩み、レジ音と、店員の「ありがとうございますあ」という音と声。変わらぬ無機質なコンビニの世界に戻っていった。

「入選」

帰ったか!!

藤田 義明（大阪府）

十五で島を出た。高校に進学する為だ。夏と冬、年に二回帰省した。この時見せた父の一瞬が、私の一生を支える事となる。

父は小さな漁師町で生まれて育ち、気性も荒かった。若くして大工の棟梁になったが、愚直な迄の職人気質で、いつも請負金額以上の仕事をした。結果、家を建てる度に赤字が膨らんでいった。このままでは私を高校、大学にやれないと言う母と口論が絶えなかった。父は毎晩の様に酒を呑んでほくだを巻き、大声で怒鳴り散らした。子供心に、「大人になっても絶対に酒は飲まない!」と固く誓った。

しかし私の高校入学が近づいた頃、突然父は棟梁を辞め、土木会社の一作業員になった。全ては私の為だった。

そして高校一年の夏、初めて帰省した時の事だ。仕事を終えた父が、ダダダつと二階へ駆け上がって来て、大声で「帰ったか!」と言うなり、ひまわりの様な笑顔を見せた。嬉しさが全身から溢れていた。会話は続かなかったが、その表情で私は全てを理解した。

又、冬に帰省した時も衝撃だった。夜に戻った父は体が雪に覆われて、帽子からは何本も氷柱が垂れ下がっていた。まるで映画「八甲田山」の兵士の様だった。私は息を呑んだ。父はほぼ凍った状態だったが、震える唇で「帰ったか!!」と言い、帽子の氷柱の向こうから太陽の様な笑顔を見せた。神々しかった。プライドを捨て去り私を進学させたその顔は、正に愛に溢れた「愛顔」であった。

私も社会人となり辛い事も多かったが、その都度父の苦渋の決断と雪まみれの姿を思い出した。耐えられない事など何も無かった。

月日は流れ、私は無事に定年退職を迎える事が出来た。あの「帰ったか!」の嬉しそうな声と、眩しい程の「愛顔」を思い浮かべながら、決して飲まないと誓った日本酒を天の父と酌み交わすこの頃である。

「入選」

ネギの匂い

三好 佳奈（京都府）

私は、大学卒業後、羽田空港でのグランドスタッフとして、航空会社に就職した。愛媛で生まれ、京都で育った私が、東京で初めての一人暮らしをすることになった。空港で働くということは、朝早いシフトがあるということだった。初めての一人暮らし、そして新社会人。緊張と不安と、寂しさで一杯になることも多く、そんな不安定になる気持ちを中心に抱きながら、早朝とはいえ、まだ真っ暗な世界を、空港までタクシーで走る。そんな日々が、東京で始まった。

私の祖母は、愛媛県今治市で、祖父とうどん屋を営んでいた。うどん屋の朝は早い。祖父も祖母も毎日、朝早くから仕込みを始める。帰省する度に見ていた、朝早くから祖母がネギを刻む姿は、ネギの匂いと共に、私の脳裏に、そして心に強く残っている。

そんな朝早い祖母と、新生活を始めた私は、朝五時にメールを通して、繋がるようになった。私が、会社を退職するまでの二年間、祖母との早朝メールが、まだ暗い中出社

する私の、心の支えだった。「おはよう、今日も笑うんよ」とか、「おはよう、今日も元気出すんよ」とか、それだけのメールだったけれど、タクシーの中で見るそのメールは、祖母の笑顔を愛媛から届けてくれていた。暗い空に押しつぶされそうになることが、何度もあった。けれど、祖母の元気な笑顔が、私の朝五時にあった。まだ暗い、孤独の朝に、「おはよう」と言える人がいた。言ってくれる人がいた。私の揺らいでいる気持ちを、優しく包み込む愛があった。だから、私は、頑張れた。

あれから、もう十年以上の月日が流れた。祖父も祖母も元気で愛媛で暮らしているが、うどん屋はたたんだ。私は、今は二児の母となった。ネギを刻むことだってたくさんある。そんな時思い出す、あの二年間を支えてくれたメール。そして、祖母の愛顔。ネギの匂いは、いつも、私は一人じゃないんだと、あたたかく優しい気持ちにしてくれる。

「入選」

ばあちゃんの手ぬくもり

矢野 三代子（愛媛県）

二十一年前、私は人生のどん底にいた。二十三歳の時、遠位型ミオパチーという進行性の筋肉の難病を発症した私は、将来に生きる希望を見いだせず、もがき苦しんでいた。毎日のように泣いては、家族を困らせていたある日、見兼ねた母が、少しでも気分転換になればと、私を島にある祖母の家に預けた。

祖母の家に来たからといって、気分が晴れるわけでもなく、何もかも嫌になった私は、家を飛び出し海に向かった。キラキラと光る海面が「こっちにおいで」と手招きしている。その時だった。急に強い力で引っ張られ、振り返ると、そこには祖母が立っていた。

祖母は怒るわけでもなく、ただ悲しそうに手を握り、「帰ろう。」

と言った。振り払おうとする私を「離すもんか」と、さらに強く手を握り返してきた。重い沈黙が続く中、ふと祖母の手が震えている事に気づいた。その瞬間、祖母の想いが痛いほど伝わり、抑えていたドロドロとした感情が涙と

なって溢れ出した。子供のように泣く私を、祖母は黙って優しく心に寄り添ってくれた。

一年後、ありがとうを言えないまま、祖母は癌で亡くなった。島の山道を登った先にお墓があったため、墓参りには行けなかった。心にずっと引っかかってはいたが、私の病気が進行し車椅子生活になったため、諦めるしかなかった。しかし、祖父の死をきっかけにお墓を市内に移すことになり、お墓参りが出来ることになった。

ずっと行けなかったお墓参り、ずっと言えなかったありがとうを胸に、車椅子に乗り、会いに行った。お墓につくと来ることを待ってくれていたかのように、あたたかい風がそつと頬をなでた。その風はまるで、あの時の祖母の手と同じ優しさだった。

「ばあちゃん、やっと会いに来れたよ。あの時はごめんね。そして、ありがとう。私、頑張るからね。」
懐かしい線香の香りが、祖母の笑顔を思い出させた。

「佳作」

姉の愛顔

入船 梓（愛媛県）

私には13歳年上の姉がいる。

私が小学6年生の時、姉が出産した。

可愛い可愛い男の子。

初めて間近に見る赤ちゃんの可愛さの虜になった。

私が中学3年生の時、姉が2人目を妊娠して実家に里帰りをしてきた。

姉に言われた。「お産に立ち会ってみる？」と。

私は可愛い赤ちゃんが産まれるのを見れるのが楽しみで

二つ返事で承諾した。

数日後、姉の陣痛が始まった。

いつも元気いっばいで優しい姉の苦痛にゆがむ表情。

何をすれば良いのかわからず、ただそばに居るだけの

私。

数時間後、赤ちゃんが産まれた！女の子！だけど、泣かない：

産まれたら赤ちゃんってすぐ泣くんやないの？と思って
いた私と不安そうな姉と目が合った。

その時「ふえ、ふえ、おぎゃー!!」と大きな声が聞こえ

た！

その声を聞いた瞬間、姉は今まで見た事ない綺麗な顔で
笑った。

実の姉ながら、ふわっと花が開くような光がさすような
言葉にできない満面の愛顔だった。

それから、姉の愛顔が忘れられず、私は看護師になっ
た。

産婦人科で命の誕生に立ち会い、我が子に逢えた瞬間
の、あの時の姉のような神々しい綺麗な愛顔をたくさんみ
てきた。

そしてこれからも、愛顔の手伝いができる幸せを感じつ
つ沢山の命の誕生に立ち会っていきたい。

（おねえちゃん、出産立ち会わせてくれてありがとう。
おねえちゃんの愛顔を見て、私の人生のルールがすーっと
看護師へ延びたよ。そしてたくさんの愛顔が見れる仕事が
できて幸せだよ。あの時のお産からもう23年、愛顔ずっと
ずっと忘れないよ）

「佳作」

伝説のキャプテン

尾木 直子（滋賀県）

とにかく暑い日だった。

たち親の席があった。

高校野球地方大会二回戦。相手は昨秋の大会で手痛い負けを喫したM高校。キャプテンをつとめる長男は、「絶対リベンジや！」と鼻息荒く家を出たが、待っていたのは、ピンチが続く厳しい試合だった。

担架が、応援席の前を通ったときだった。
「うおおおおっ」
長男は横たわったまま、雄叫びをあげた。
両手を突きあげ、ガッツポーズをしてみせる。

六回裏もノーアウト満塁の大ピンチになった。一塁を守る長男は、バントを警戒して何度も前進守備をとっていた。キャプテンらしく、チームを鼓舞する声に応援席まで響いてくる。

次々に拳をふりあげた。
「うおおおおおおっ」
「うおおおおおおっ」
「うおおおおおおっ」

一人三振。二人三振。

「うおおおおおおっ」

暑い中、ジリジリと一点もやれない緊迫する時間が流れてゆく。続く打者も三振にとり選手たちが喜びに沸きながらベンチにかえって来た。

応援席のうねりが、勝利をよびこんだ。
「あのままシヨンボリ退場したら、あかんと思って。痛かったけど、気付けば吠えてたわ」

その途中、長男が崩れ落ちた。
ひどく足がつったのか、立ち上がれず、担架が運ばれてくる。チームメイトや先生がかけつけ長男は担架に乗せられた。

長男は得意気だ。先生からは「担架の上でガッツポーズをした選手は初めてや」と笑われたらしい。その後チームは勝ちを重ねたが、ベスト8で力尽きた。
「伝説のキャプテンになってしもたなあ」

応援席はざわめいていた。最前列にはベンチに入れなかった三年生。その後ろには大勢の後輩たち。その奥に私

暑くて熱い夏を終えた長男は、誇らしげに笑った。

「佳作」

藤棚の下で

木村 敬子（滋賀県）

私は徒歩での琵琶湖一周挑戦中に滑って脊椎骨折、入院となった。しばらくしてリハビリ担当のAが連れてくれた院内の庭園の池、そこは眩しく輝いていて私は琵琶湖を思った。

「私、琵琶湖一周、踏破したいんです。もう無理ですね」

私は思い切って彼に話しかけた。

「一緒に歩きましょう。僕は三回踏破しました。僕に任せ」彼はにこやかにそう言った。

次の日から一周約五百メートルの池を琵琶湖に見立てて歩き始めた。彼は歩行器を押す私の後ろから支えてくれた。しばらく歩くと彼は私をベンチに導き、前の木に琵琶湖大橋堅田の拡大写真ボードを掛けてくれた。そして、「琵琶湖大橋に着きましたよ。初日なのに一気に歩きましたね。足や腰は痛くないですか」と言って足腰をマッサージしてくれた。それから浮御堂、大津港、矢橋と彼はその地点の写真を用意し俳句や歴史など色々な話をしてくれた。彼と歩いた距離は四十キロを超えた。いよいよラス

ト区間、琵琶湖大橋守山へ、私と彼のビワイチの千秋楽、彼の吐息を背中に感じながら黙って歩いた。そして藤棚の下、彼の吊るしてくれた琵琶湖大橋守山のお満灯籠のボードに二人で一緒にゴールタッチした。

「K（私）さん、おめでとう。見事踏破しましたね。途中で諦めずに本当によく頑張りましたね。偉い」彼は得賞歌を歌いながら拍手してくれた。そして予め用意してあげていた藤の花弦の冠をそっと頭にのせてくれた。そして自分の名前入りの踏破証を渡してくれた。

この三か月、いつも萎える心の横で優渥な心の伴走、決して私の前に出ることなく、手を添えて励まし目指すものを持ち続けさせてくれた。リハビリを受けていることも忘れてしまうような独創性とその篤行、もう毎日が感動の涙とときめきの連続だった。彼は私を回復に導いてくれた魔術師。邂逅、そして今、熱涙の別れ、彼の作ってくれた花藤の冠、踏破証を持って。彼は私のこれからの人生の原動力。何か玄冬の淡い片恋のような気もする。

「佳作」

愛顔を呼んだ愛情弁当

後藤 里奈（東京都）

教師である私にとって、昼休みに子供たちと教室で昼食をとることは大切な日課の一つだ。

数年前、中学一年生のあるクラスを担当していた時のこと。いつものように昼食を持って教室へ行くと、なんだかやけに騒がしい。また「事件」が起きたのだろうかと慌てて生徒たちのもとへ駆け寄ると、一人の男子生徒がしょんぼりと立ち尽くしている。目線の先には、無残にも床に散らばったお弁当が。どうやら誤ってお弁当をひっくり返してしまったらしい。その子には発達障がいがあり、人とコミュニケーションをとるのが苦手で、何かにつけ不器用な生徒だった。まるで大好きなおもちやを取り上げられた子供のように落ち込む彼に、かける言葉も見つからない。どうしたものかと困っていると、「これ食べる？」と、隣の席の女の子が彼に自分のおかずを差し出した。すると他の生徒たちも「これ好き？」「俺のもあげる！」と、次々とおかずを彼に分けてくれた。気づけば、彼のお弁当箱の蓋には卵焼き、ミートボール、きんぴら牛蒡など、たくさ

んのおかずがてんこ盛りになっていた。皆の思いやりが詰まった「超豪華弁当」の完成である。最初は戸惑っていた彼も、クラスメイトから優しさのお裾分けを受け徐々に笑顔になっていった。口いっぱいにおかずを頬張る彼に、「いいなあ」「美味しい？」と子供たち。いつにも増して和やかな昼食時間となった。仲間と分け合うことの喜びを、子供たちは教えられなくとも知っていたのだろう。食べ終わる頃には、皆の心まで満たされていた。

微笑ましく眺めていると、「先生はあげないの？」とある生徒。こういう時に限って、食べかけのパンしか持っていなかった私。「アハハ」と、教室内にまた笑顔の花が咲いた。それ以来、どんなに忙しくても手作りのお弁当を持つ参するようにながけている。自分のためではなく、誰かのために来る時が来ると信じて。

「佳作」

最後のプレゼント

醍醐 恒子（広島県）

「お前には笑顔が一番似合うよ」

いつもと違って弱い声で、夫が話しかけてきた。

あの日の朝早く入院先の病院から、「ご主人の大腸癌の術後の回復は順調だったのに、突然どこからか出血が始まりました。今日原因を探すための再手術をします」と、電話の向こうから事務的な知らせがあった。

再手術と聞いて頭が真っ白になった私は、何も手につかず、大急ぎで主人の待っている病院へと向かった。

いつも通り慣れた道なのに、どこか違った道を走っているようだった。

慌しく病室へ入った私の顔を見て夫の口から出たのが、冒頭の言葉だったのだ。

やがて、車椅子に乗せられて手術室に向かうとき、突然、「ハイタッチをしよう」と。続けて「もう一度」と、夫のいつにない言葉に思わず笑顔でハイタッチをした。長引く手術に、一心に祈る私を置いて、出血の原因が究明されないまま、夫は旅立って逝ってしまった。「ありがとう」の

言葉さえ伝えることもできずに。

八人兄弟の末っ子として生を受けた夫は、ほがらかな家庭の日々の生活の中で、スクスクと育った。暖かな環境の中で心を培われたからだろうか、心からの愛顔が素敵だった。

仕事などで落ち込んだとき、どれだけ夫の笑顔に励まされ、すくわれたことか。二人でいると、笑いが絶える時がなかった。

今、ちよつと気分が滅入ったときは、まず鏡を見る。

「笑顔が一番似合うよ」。自分の病気が大変な中で、笑顔などできない再手術の前に、逆に私を励ましてくれた夫の言葉。

鏡に向かって「ありがとう、笑顔が一番だね」と言いつつ心からの笑顔を鏡に写して、前を向いている自分がある。

「佳作」

命のおすそ分け

巽 久美子（神奈川県）

「おばあちゃん長生きしてね」と白寿祝をしてから四年。祖母は今年で102歳になり、今日も元気で食欲旺盛だ。足が悪く車椅子生活だが、記憶力と大きな笑い声は衰えを知らない。大正十年生まれで関東大震災の二年前から生きている。祖母がこれほど長生きできる理由……。それはきつと祖父からの「命のおすそ分け」だと私は考えている。

祖父母は満州で出会い結婚、父が生まれて満州で終戦を迎えた。昭和二十年八月、警察官だった祖父は一歳過ぎの父と二十代の祖母を残しシベリア抑留者として旅立った。別れ際「ヒサミツの事頼んだよ」と交わしたのが祖父母の最後の会話になった。別れを惜しんだのも束の間、広大な満州の地から引き揚げ、帰国しなければならぬ。ヨチヨチ歩きのお父さんと二人で祖母はどれほど不安だったろう。警察官のご家族の一人に入れて頂き、昼は身を隠して、夜中に南へ向かって歩き続けた。

「イチニ、イチニ」と歩く幼い父の手を引き、リュック

に入るだけ詰め込んだ衣服や私物を売って食料に代えた。荷物の中に山羊皮で作られた父のチョッキが入っていた。これは祖父と別れる際に「寒いといけないから」と持たせてくれたという。大切なチョッキは手放したくないと頑なに守っていたが、飢えには耐えきれず、最後はじゃがいもに代わってしまった。

引き揚げ船に乗り命からがら生きて帰ることができた。山羊皮のチョッキが母子の命をつないでくれたのだ。祖父はシベリアの地で飢えと寒さで、若い命で天国へ逝ってしまった。祖父は短い人生だった分、その命を祖母におすそ分けしているのではないかと思う。楽しみだった父の成長や家族の幸せを祖母にその景色を見てほしくて託したのだろう。

「命のおすそ分け」のおかげでコロナ禍も無事に乗り越える事ができ、施設で暮らす祖母にやっと面会できるようになった。祖母の柔らかい手をもう少しだけ長く握っていたい。

「佳作」

運転お疲れさま

豊 恵子（石川県）

元気だった夫が、コロナウイルス感染症で逝ってしまったのが二年前。

本日、三回忌となる。

法要を行う本家のお寺へ向かう。車でゆっくり約小一時間、早めに出発した。

少ししてから、運転する私にペットボトルのお茶を、娘が手渡してくれた。

「ママ。はい、お茶」と、キャップを外して。それを受け取った瞬間、

「プシャー！」薄く柔らかすぎるペットボトルだった。

全く想定外の感触で、左手に握ったペットボトルの口から一気にお茶がこぼれてしまった。

「キヤー！」娘とふたり、車内で絶叫。

慌てて、濡れてしまった喪服をタオルでばたばたと拭いた。

「コーヒーじゃなくてよかったね……」

以前は、夫と娘と私の家族三人でよくドライブした。

運転しながら夫がいつも飲むのは缶コーヒー。その日も途中のコンビニに寄って飲み物やお菓子を買い求め、車に乗りこんだ。しばらく進んでから、

「パパ、コーヒーあげようか」

「うん、ちょうだい」

後部座席に座る私はコンビニの袋から缶コーヒーを取り

出し軽く振る。プシュッとプルタブを開けてから運転席に座る夫の手元へと渡した。

「はい、コーヒー」

「ありがと」

夫は左手に受け取った缶コーヒーをそのまま口に持っていくのではなく、素早く上下に缶を振った。

「ギヤー!!」

開いた缶コーヒーの中身がぶちまけられ、車内はコーヒーまみれに。

一瞬でのその惨状に思わず大爆笑した。まだ開けていないと思った夫は、いつものように中身が均一に混ざるように缶を振ったのだった。

それ以来、必ず同様の場面になると、

「パパ、コーヒー。振って開けたよ。開いてるよ。開いてるからね。開いてるから」

必要以上にしつこく何度も念押ししながら渡すのが常になった。その毎回のせりふに、つい吹き出して笑ってしまう。

三回忌の今日。あの日のコーヒーまみれになった思い出が懐かしくよみがえって、娘と笑い合った。

夫の屈託のない笑顔が脳裏にちらつき、思い出し泣きしながらハンドルを握った。

「佳作」

山漢の賛歌

藤原 奈々（愛媛県）

太山寺に行ったのは偶然だった。「どこでもええけん、でかけたい」そう言う祖父を病院から連れ出した。特に行き先を決めずドライブをして、目に入った道路標識につられてハンドルを左に切った。駐車場に車を止め、祖父を車いすに乗せる。たわいないおしゃべりをしながら、境内を目指す。体力には自信があったので簡単に考えていた。病気で痩せたとは言え、第2次世界大戦を生き抜き、生きるためにと昼夜問わず働いてきた祖父は頑丈な体つきをしている。徐々に勾配がきつくなり進むペースが落ちていく。車いす用の駐車場に止めなかったことを後悔した。会話が途切れ途切れになる。そのうち車いすを全く押せなくなってしまった。靴底が砂利で滑り、車いすがじりじりとずり下がってしまう。もし私が一瞬でも力を抜けば、祖父は寿命を待たずあの世行きた。進むことも戻ることも出来ず、絶体絶命という非日常的な言葉が頭に浮かぶ。「ちよっと歩こうわい」見かねた祖父はゆっくりと立ち上がり、自分で車いすを押し始めた。入院してからはトイレとリハビリ

でしか歩くところを見たことがなかった。私は慌てて祖父の背後に回り、車いすのハンドルを握って身体全体で背中を支えた。少し進んではブレーキをかけ車いすに戻って休憩。それを何度も繰り返す。気の遠くなるような作業だ。雨上がりの午後、他に参拝者は居ない。クマゼミの鳴き声だけが響いている。二人して滝の様に汗をかき一時間以上かけてようやくたどり着いた。手水舎で浴びるように水をかぶる。心地よい風が吹き抜ける。「がいに気持ちがあえ、おもしろかった、おもしろかった」バテている私の横で祖父は銀歯を見せて笑った。山で生まれ、山で生きてきた祖父は94才。

遺影の祖父はかしまっていて気に入らなかった。私はあの夏の大冒険で見た笑顔が大好きなのだ。余命宣告を3カ月もとび越えて山漢は山に還った。そして今も無邪気に笑っている。

「佳作」

一輪の愛顔

本田 美徳（大阪府）

悲鳴、号泣、慟哭。最も笑顔が似つかわしくない哀切極まる現場で私は一輪の愛顔をもらった事がある。約十二年前にもなる東日本大地震での出来事だ。私は大阪から東北地方の被災地まで派遣された警察官だった。津波の後で発見されたご遺体を安置所に収容し、その遺族支援を私達は行った。何百というご遺体の確認に来られる遺族が立ったまま行う仮葬儀への立会いや納棺の手配などこれまで経験した事の無い悲しく辛い任務だった。

あれは何体目のご遺体だっただろう。そのご遺体は若い男性で服のポケットに遊園地の半券が入っていた。ご遺体安置情報という張り紙にご遺体の特徴が記載されていて、その情報を目にした婚約者が安置所に訪ねてこられた。服装も、何より彼女も持っている半券が一致する。万事休すと思ひながら私は、気を確かに持って、できるだけ元気だった頃の彼を思い出して確認して下さい、と、ありきたりの言葉でしか彼女に語りかける事ができなかった。そして号泣される彼女の横で私はただ立ち尽くす事しかでき

ず、気を遣う彼女に、「泣いて下さって構いませんよ。」と、またもありきたりの言葉しかいえなかったのだ。

安置所で気づいた事があった。遺族はご遺体との最初の対面をされて悲嘆に暮れる。だが日が経つにつれ、悲しみながらもそこに生前の人がいるように語りかけるのだ。発見されて遺族の元に帰ってきてくれた事を安堵するかのよう。彼女は改めてご遺体を引取りに来られた時に、私にこういった。

「お巡りさんが、泣いていいよ、っていつてくれて。あの時、少し楽になりました。」

気丈に添えてくれた哀しい笑顔。その笑顔の向こう側に祭壇へ供えられた野菊が見えた。

一輪の哀しい愛顔。何故人はこんな哀しみの極地の中で人に優しい愛顔を向けてくれる事ができるのだろう。制帽を深く被り直した私は涙を隠すのが精一杯だった。あの一輪の愛顔は今でも私の心に深く刻まれている。

「佳作」

朝顔

横川 容子（埼玉県）

三十年勤めた会社を退職した。夫婦二人で車は一台で十分と通勤用の車を売却した。

玄関前の駐車スペースがぼっかり空いた。

朝七時に出勤して夜七時に帰宅する。今まで忙しく働いていたがいきなり暇になった。

夫は仕事で昼間はいない。私は出身も職場も他県で近くに親戚も友人もない。仕事も話す人もなく、無人島に流されたようだ。

朝テレビを見ていると外でガヤガヤ声がする。家の前を集団登校する小学生の行列だ。

七時二十分、家を出た後で知らなかった。

それを見ると子供の頃を思い出した。

私も近所の子と並んで登校していた。道端には花壇があり季節の花が咲いてそれらを愛でながら歩いていた。

その時、ふとこの子たちの通学路にも花が咲いたら楽しかろうと思いついた。登校する時に咲く朝顔がいいだろう。

早速空いた駐車スペースに植木鉢をズラリと並べ色々な朝顔を二十本植えた。つるが伸びると輪が三段になった支

柱を立てた。早起きは得意なので水やりは朝五時から始めた。

ある日、日傘を差した老婦人が微笑みながら声をかけてきた。

「朝顔ですか。たくさんありますね。咲いたらきれいでしょうね。楽しみにしているわ」

「はい。ありがとうございます」

朝顔の成長と共に声をかけてくれる人が増えた。散歩する人、犬連れの人、ランナー。

早朝こんなにも人が出歩いていたのか。そして彼らはうちの朝顔を楽しみにしている。

期待されると手入れにも俄然力が入る。順調に育ち八月には色とりどりの花が咲いた。

今では大人も子供も立ち止まりにこにこしながら見ている。それを見て私も嬉しくなる。声をかけてくれた人達は顔なじみになり立ち話をするようになった。私も少しずつ近所に溶け込んでいる。

☑ リアルタイム配信で翌朝の新聞より早く記事が読める

☑ 広告大幅カット!サクサク読める

☑ Web限定記事など愛媛新聞ONLINEの全コンテンツが読める

☑ 会見・人事異動・自治体選挙など速報の充実

☑ 過去3年間分の記事を検索

デジタルプラン

〔個人会員〕月額プラン

¥1,980

〔法人会員〕年間プラン

¥21,384

(1~5アカウントの場合)



愛媛新聞社編集局「デジタルプラン」係

E-mail media.info@ehime-np.co.jp

TEL 089(935)2254 (平日9:00~17:00)



愛媛新聞社

未来へ。
咲く、
きずな、

地域に根ざす、
信用金庫として。
手から手へ。
心から心へと。
つなげてゆきたい
想いがあります。



「愛」ある街のホームドクター

愛媛信用金庫

『地域とともに、未来をえがく』

住友金属鉱山株式会社
住友化学株式会社
住友重機工業株式会社
住友共同電力株式会社
住友林業株式会社
三井住友建設株式会社



安心と信頼の絆で、
未来に寄り添う。

くらしの保障、相談するなら

JA共済

※ご加入にあたりましては、お近くのJAへお問い合わせください。
どなたでもご相談いただけます。

■JA共済ホームページアドレス <https://www.ja-kyosai.or.jp>

「エピソード部門」高校生以下の部

未来のノート

越智 亮介（愛媛県）

私は、母のことを知らない。人柄はどうだったのか、何が好き・苦手だったのか、口癖は何だったのか。何一つ知らなかった。

私が2歳のころ、母は、病気によってこの世から旅立った。何が起きたかもわからなかった私を、父は葬儀後、祖父母がいる愛媛に連れて帰ってきた。しばらくは父の兄弟も祖父母の家に来て、私の世話をしてくれた。保育園に入っしてしばらくして、私を毎日送り迎えしてくれるのが祖父母と父であり、周りは母親が送り迎えをしていることに疑問を感じ始めた。ある日私は、父や祖父母に「なんで周りはお母さんが迎えに来ているの？」と質問をした。父は「アイス買いに行こうか。」とごまかした。今思えば、父に申し訳ないことを言ってしまった。私が6歳になったころ、父は母がこの世を去っているんだと話してくれた。本当は自分自身でもどこかで分かっていたけれど、いないと聞いたときは泣き

叫んでいた。中学生になったころ、私は部活動の人間関係で悩むことが増えた。精神的に限界になったとき、父がドライブに連れて行ってくれた。父は車の中で「逃げたいときは逃げてもいい。だけど自分にとって後悔が残るなら戻ればいい。」と言った。そして、この言葉は、父が仕事や人間関係で悩んでいるとき、いつも母が言ってくれたのだと話してくれた。私はこの言葉をきっかけに、もう一度頑張ってみようと思った。高校生になったある日、父と倉庫の整理をしていた私は、ある段ボール箱を見つけた。中には、私の幼かったころの写真と、何冊もの成長日記が入っていた。ページをめくると、母の字で、私ができるようになったことや嬉しかったことが書かれていた。あるページで私の目は止まった。そのページには、「優しく、誰にでも愛される存在になってほしい」と書かれていた。

母は亡くなるまで、私のことを愛情いっぱい大切に育ててくれた。私はそのことを知り、どんなに時間が過ぎようが、母は私にとって唯一無二の存在だと思った。

「特別賞」

父の誕生日プレゼント

池内 沙藍（愛媛県）

二年程前の父の誕生日。私の母は、一か月くらい前から、父に秘密で入念に準備を始めた。姉と私にも協力をあおぎ、いくつかのプレゼントを用意した。姉は、消しごむはんこを作った。私は、簡単なレシピを調べて、スコーンを作った。母は、使い捨ての眼鏡ふきと、父の仕事で使えそうなガチャポン、そして、タクシーチケットを用意した。このタクシーチケットとは、母の手作りのチケットで、飲み会などで帰りが遅くなったとき、このチケットを使うと、母に文句を言われず、気持ちよく迎えに来てもらえるというチケットのことだ。

そして、ついに迎えた父の誕生日。私たちは、父の帰りを楽しみに待っていた。帰ってきた父を、三人の「ハッピーバースデー！」という歓声でむかえ、準備していたプレゼントを渡した。

まず、姉の消しごむはんこは、材料費こそ百円だが、百円とは思えな

いほどのクオリティで、父の仕事でも使いやすいデザインになっていた
ので、父はとても喜んだ。私のスコーンも、おいしいと喜んでくれた。
そして、母のプレゼントを開けて、眼鏡ふきやガチャポンは喜んでくれ
たが、タクシーチケットを見て、父の表情が変わって、こう言った。

「税金チケットって、何？」

母が一枚一枚愛をこめて作ったタクシーチケットには「I」がなかつ
たのだ。母はTAXIチケットと書いたつもりだったが、TAXチケッ
トになってしまっていた。しかし、数秒で全てを悟った父は、すぐに笑
顔になった。

確かに、プレゼントのチケットには「I」がなかったが、私達の家には「愛」があふれていると思った。

「優秀賞」

四つ葉のクローバー

竹内 維吹（愛媛県）

ある日のこと、珍しく神妙な面持ちで帰ってきた父が家族全員を招集した。一つの部屋に集められ、父に何の話か聞いても、

「全員がそろってから」

と、何も話してくれない。母も弟も僕も、いつもとあまりにも違う父の様子に不安を抱きつつ、兄の帰りを待つ。兄がバイトから帰ってきて、異変に気づき表情を硬くする。家族5人がようやくやくそろい、父がようやく口を開いた。父が発した言葉は、

「庭で……四つ葉のクローバーを見つけた！ラッキー！」

本当に時間を返してほしい。さっきまでとは変わって満面の笑みの父に少しだけ、ほんの少しだけイラツとする。でも、そんな小さな幸せでこんなにも笑顔になれる父をうらやましく感じる自分もいた。くだらないことで長時間待たされ、四つ葉のクローバーを見つけた報告をされただけなのに、「それだけ？」と、その部屋は笑顔で満たされていた。

幸せは人の数より少しだけ少なく用意されているとよく聞く。人の幸せは平等だとも聞く。そういうのはだいたい物質的な豊かさの話をしているのだと思う。生まれた場所や環境など、自分の努力で覆しようのない差はどうしてもある。だけど本当の幸せは、四つ葉のクローバーのような小さな幸せを見つけられることだと思う。「幸せ」はそこから中にたくさんあって、その小さな幸せを他の人より多く見つけられる人は自分を幸せだという。自分は不幸だと言う人は小さな幸せを見つけないのが下手なだけ。僕はそう考える。

僕はまだ生まれてから十七年しかたっていない。最高の幸せを知っているわけでもないし、絶望の底のような不幸を味わったこともない。でも、だからこそ幸せが大切だとわかる。幸せは周りに伝搬する。まずは自分が幸せであるように幸せを上手に見つけられるようになり、父のように周りの人を笑顔にできる人間になりたい。

「優秀賞」

しりとりりの続き

御手洗 彰彦（愛媛県）

今から十二年前の話になる。私が、三歳だった頃だ。やっと言葉を上手く話せるようになった時、ひいおじいちゃんにしりとりをしようと言われた。私は、しりとりというのが何か分からなかったので聞き返した。ひいおじいちゃんは丁寧に説明してくれた。三歳の私が理解できるように物を使って説明してくれたおかげで、しりとりができるようになった。こうして、毎週ひいおじいちゃんの家に行って、しりとりをするのが、私の楽しみの一つになった。私は最初のほうは、弱すぎて相手にならなかった。すぐに最後が「ん」の文字が来て終わってしまったからだ。けれど終わったときには、ひいおじいちゃんと私で大爆笑していた。そして、少しふり返りをして、新しい言葉を私が一つ覚えて、またしりとりを再開させる。また私が負けるの繰り返しだった。負けることは分かっていたが楽しかった。毎日のようにしりたりのことを私は考えていた。次第に私も強くなっていき、ひいおじいちゃんと互角の勝負をするようになった。そして時は過ぎ三年がたったある日、

家に一本の電話が届く。なんとひいおじいちゃんが救急搬送されてしまったのだ。あまりの突然のことに私は大泣きした。もうしりとりができなくなってしまふんじゃないかと思った。不吉な予感の中し、翌日ひいおじいちゃんは息を引きとった。あまりのショックに私は立つことができなくなつた。その時だった。ひいおじいちゃんの左手に何か書かれてあるのが分かった。そこには手書きで、ありがとうあきひこと書かれてあった。実はしりたりの最後の文字が「あ」で終わっていて、次はひいおじいちゃんからだのだ。私はこれを見てとても嬉しかった。亡くなる直前までしりとりを考えてくれていたのだ。そして私はしりとりで返した。こちらこそありがとうひいおじいちゃん。そして最後のしりとりも私が語尾に「ん」がつき私の負け、やっぱりひいおじいちゃんにはいつまでも勝てなかった。

「優秀賞」

小さな神様と私

森田 帆南（愛媛県）

「心臓に穴が空いている」

妹が生まれた時、お医者さんがそう言った。幼い私にもその言葉の意味は、すぐに理解できた。死んじゃったらどうしよう。そんな不安が私の頭をいっぱいにした。数本の管が繋がれ、重々しい機械が作動している。他の赤ちゃんとはまるで違う様子に私の不安は加速するばかりだった。

数日経ったが、お母さんと妹は病院から帰ってこない。

私は藁にもすがる思いで、近所の徒歩数分の公園へと向かった。

公園の隅に建てられている小さな祠。誰かが手入れをしているのかも分からないような祠。私は落ちているキレイな葉っぱや木の実を拾って、祠の前に置いた。そして手を合わせ「妹が元気になりますように」と一心に願った。これが日課になっていた。

しばらくして願いが通じたのか、お母さんが妹を抱いて帰ってきた。私は嬉しくてすぐに駆け寄った。妹の手を握ってみると、ギュッと握り返してきた。とても温かく

て、今生きているということを実感させられた。

そんな妹も何事も無く、元気すぎるくらいに成長した。

先日、妹と歩いているとあの祠と目が合った。

「こんなところに祠あったんや」

妹が不思議そうに言った。

「あるよ、昔から」

私は当時のことを思い出しながらそう返した。妹はふー

んと言い、その祠を見つめていた。私はその様子を見て、

思わずクスクス笑ってしまった。

「え？なに笑ってんの？」

妹は私を不審そうに見ていたが、それにますます笑いが込み上げてきた。理由を聞いたです妹を横目に私は「ヒミツ」と言い、また歩き出した。小さな祠に奉られている小さな神様に感謝しながら。

「入選」

バトンを繋ぐ

私には地域のおじいちゃん、おばあちゃんと関われる唯一の時間がある。それは私たちの地域の伝統芸能である伊予万歳を教わっているときだ。その時間は、おじいちゃん、おばあちゃんとたくさん会話を交わすことができ、とても楽しい。「昔はのう……」と私の地域の昔の話をしてくれるのは、とても興味深い。伊予万歳はおじいちゃん、おばあちゃんと私を繋ぐための大切な伝統なのだ。

伊予万歳をしている私たちには、地域の祭りや、市のイベントなどで踊りを披露する機会がある。私たちの踊りに若者はなかなか興味を示してくれないが、高齢の方は顔いっぱい笑みを浮かべ温かい目で見守ってくれている。私たちの師匠であるおじいちゃん、おばあちゃんも「今日は綺麗やったよ。上出来。上出来。」と褒めてくれる。私はそれが嬉しかった。

こんな感じで伝統芸能を続けている中で、一番心に残っていることがある。それは、松山ベテル病院に踊りに行ったときのことだ。その病院には、末期の患者さんがたくさん

上松 心菜（愛媛県）

いる。その患者の一人に師匠がいた。その師匠はガンの末期だった。そんな師匠から最後にもう一度見せてほしいとお願いがあり、病院との交渉の末患者さんの前で披露できることになった。

しかし、師匠はその目を目前にして亡くなってしまった。最期に見せてあげられなくて悔しい気持ちでいっぱいだった。本番当日、そこにはもう師匠の姿はない。けれどもたくさんの患者さんが見てくれた。涙を流して見てくれる人もいれば、盛大な拍手をしてくれる人もいた。私たちの踊りで感動してくれて、今までになく嬉しかった。

伝統芸能は古くさいとか、いらないでしょと思う人もいる。しかし私は世代と世代を繋ぐ大切なバトンだと思っている。人に活力や元気、感動を与えられる伊予万歳。次の時代にもバトンを繋いでいきたい。

「入選」

恐竜の鉛筆

菊池 ルミナ（愛媛県）

中学三年生の秋。高校受験を控えた私達は「暑いけん勉強やる気出んね。」「どうせせんやる。」と、他愛もない会話をしながら、残暑の残る中、緩やかな坂を登っていた。下校中の小学生と笑顔で挨拶を交わしていると、低学年くらの男の子が荷物をひこずりながら帰宅していた。「荷物持つよ。」優しく声をかけると、男の子はうれしそうに返事をした。男の子は最近、バスケットボールのチームに入ったらしく、新しくできた友達のことや、好きな選手の話をしてくれた。「お姉ちゃん達もバスケットやってるよ。」という、「一緒にやろうよ。」と誘ってくれた。男の子の家には新しいゴールとボールがあった。一緒にバス練習をしたり、一対一をしたりした。「今日くらい勉強サボっちゃってもいいよね。」友達とそう言いながら日が暮れるまでバスケットをした。「土曜日試合があるんだ。」帰り際に男の子がそう言った。「頑張ってるね。応援しとるけんね。」友達とそう言い手を振った。

一週間後、補習で帰りが遅くなり、友達と急いで帰って

いると、あの場所で男の子が待っていた。小さな袋を渡し、走って帰って行った。中には手紙と、恐竜の鉛筆が入っていた。手紙には、「しあいかつたよ。ありがとう。ぼくのおきにいりのえんぴつつかってね。」と、不器用な字で書いてあった。中学生になり、鉛筆を使う機会はなくなったが、うれしくて自然と笑顔になった。

その後、無事高校生になった。今でも、受験勉強で小さくなった恐竜の鉛筆が机の端にある。それを見ると温かい気持ちになり自然とまた愛顔になれる。

「入選」

甘いトマト

田中 敦稀（愛媛県）

蝉が必死に鳴く暑い日の小学二年生の夏休み。西予市にあるはとこのおばあちゃんの家へ行った。

そこではいつもは怖いはとこのおじいちゃん、「おっちゃん」が野菜を育てていた。トマトに始まりキュウリやナスやスイカすら育てていた。

その畑の周りで遊んだあとは、サラダや野菜炒めを食べた。子供ながらに野菜のおいしさに感動したのは今でも覚えている。特に際立っていたのがトマトだった。おいしい青々しさがあってジューシーだった。おまけに野菜のお土産まで貰って夜道を家まで帰った。

その後も定期的に松山へ野菜を送ってもらっていたのだが、悲劇が起きた。2018年の西日本豪雨だ。豪雨が終わった後の写真を送ってもらおうと胸が痛くなった。床上浸水したことで家の家具や床がダメになって、畑や流木やごみで荒れていた。親戚にけががなかったという安心も束の間、崖から落とされたような気持ちだった。おっちゃん野菜がない夏は初めてでさみしかった。

翌年は畑仕事をする余裕も出来て、おっちゃんが野菜を作っていて、野菜を送ってもらった。段ボールを開けた瞬間、夏野菜が生き生きしていて驚いた。なんとというか野菜という風格があった。キュウリ、ナス、ゴーヤ、スイカそしてトマトが入っていた。あまりにおいしそうだったのでお母さんにトマトを切ってもらって一口食べて、

「うまい！」

思わず叫んでしまった。甘くて濃厚な味のトマト。トロっとした果肉が口に広がってなんともおいしい。愛がこもった「おっちゃんのトマト」が食べられるということは豪雨からの復興も意味していていつもよりおいしく感じた。おっちゃんたちの底力を見せつけられたような気がした。いつもは怖いおっちゃん笑顔が頭に浮かんだ。

今年の夏もおっちゃんの甘い甘いトマトを食べられることが出来た。

「入選」

大好きなじいじへ

藤澤 明（愛媛県）

じいじ、あなたにこの声が届いていますか。あなたから受け取った沢山の愛を、私は決して忘れることはありません。

私には血縁関係のある祖父母のほかに、もう一組、血縁関係はないけれど、まるで家族のようなじいじ、ばあばが松山にいます。私の両親は、勤務時間が不規則で夜遅くになっても帰ってこないことがあります。血縁関係のある祖父母が家に来てくれることはありませんが、祖父母の家は私の家から遠く、両親の帰りが遅くなる際に毎回来るということはできませんでした。誰もいない家に一人、幼い頃の私にはとても寂しいものでした。

小学一年生の夏のある日、私は家の鍵を忘れ、家に入れずにいました。すると、向かいの家のお夫妻が家へ上げてくださいました。これが、私に松山のじいじ、ばあばができたきっかけです。その出来事があったから、両親の帰りが遅くなる度に私を預かってもらうようになりました。小学校低学年のやんちゃな私を預かることは、とても大変な

ことだったと思います。なのに嫌な顔一つせず、温かい愛顔で私に接して下さいました。じいじ、ばあばとお話をすることが私は一番好きでした。じいじとばあばは週に一回か二回、小学四年生の春まで私を預かってくれました。

今は、松山のじいじはこの世にはいません。

じいじ、そちらの世界はどうですか。私はこの春から高校生になりました。沢山の良い仲間にも恵まれて充実した毎日を送っています。ある日、じいじが声をかけてくれたことで生まれたかけがえのない思い出。長いようで短かった四年間。じいじから沢山の恩を受けたのに、返せなくてごめんなさい。じいじからもらったやさしさは、私が出会ってきた、また、これから出会う多くの人に広めていきます。

最後に、じいじに伝えるべきなのに、恥ずかしくて伝えられなかった言葉を綴ります。

「じいじ、大好きだよ。」

「入選」

家族

二神 あい（愛媛県）

私は、高校生になり一人暮らしを始めた。「早く家から出たい」という思いから自分で決心した。春、ウキウキで家を出たが今はどうだろう。朝目覚まして起きて、弁当を作って、帰ったら洗濯物をする。その中で、家族という存在がいないことに疲れてきた。

ある時、私は「なんか疲れてきた。笑」とできるだけ気取られないように母にラインをした。自分から決めた事だから、今になって疲れたということが恥ずかしかったのだ。すると、ビデオ通話がかかってきた。通話ボタンを押した途端、母の顔が画面一杯に映しだされた。一体何事？と思っていると、母はカメラを回し家族の様子を紹介し始めた。それは、私が今まで当たり前のように見てきた何の変哲もない風景だった。その時、涙がポロポロ零れてきた。悲しいのではなく、嬉しくて泣いてしまっていた。泣いているのを悟られないように、頑張って声を張って大きな声で話した。片手に、涙で濡れたスマホ。片手に、もう払拭能力を持っていないティッシュを持つ。この時間が

ずっと続けばいいのにと切に願った。その後「なにしようが？」「今日のごはんなにやった？」「くつろぎよった」などと当たり障りのない会話をして電話を切った。その時気づいた。電話をしていた時は気づかなかつたが、私にとって家族とは心の支えだったのだ。なぜならば、電話を切ってまた一人になった途端、どうしようもない虚無感に襲われたから。

離れてから気づいた、家族の大切さ。誰もが、親に「ありがとう」「大好き」と言うが、私は、この言葉を今なら心の底から大きな声で言える自信がある。直接言う勇氣はない。でも、今まで表面上だけで「ありがとう」と思っていたのが、本当の意味で「ありがとう」と思えるようになった。まだ、高校生活は始まったばかり。今日は体育があるのか、と少し憂鬱になりながらも、私のことを支えてくれている家族の存在を忘れずに、今日も勢いよくドアを開ける。



「やさしく触れていいですか？」
この問いに、世界中のすべての人から、
力強い「Yes!」をもらえるように。
気持ちのために。
からだのために。
そして地球のために。
エリエールの
「やさしさへの挑戦」は続きます。

みんなの、すくそばで働くものだから。
ひとの肌、直接ふれるものだから。
私たちエリエールは、
なによりも「品質」にこだわっていきます。
「どこまで人間にやさしくできるか」を
追い求めていきます。
ひとりひとりの幸せと、
そんな「スキャンシップ」を通して、
深くかかわっていきます。



大王製紙株式会社 <https://www.elleair.jp>

この星と人のチカラに。



太陽石油 SOLA TO

もっと、
この街の声をかたちに。



この街に、あってよかった。

「フジがあってよかった。」
街のために、お客さまのために、
わたしたちができることはなんだろう？
これからもフジは、お客さまの声と想いを集め
もっと楽しい、ワクワクする、ホッとすることを、
お届けしていくために、進化していきます。
もっと、あなたの「この街に、あってよかった」へ。
わたしたちフジのこれからも続く挑戦に、
ご期待ください。



本部/松山市宮西一丁目2番1号

感動を、けずりだそう。

マルトモ



鹿児島県枕崎製造のプレミアムなかつお枯節を使用。
「おいしさ1.5倍」の琥珀色が特長です。 ※当社一級品比

好評
発売中

「プレ節」25ミクロン※
花けずり



259袋 / 50g袋

「プレ節」25ミクロン※
ソフトけずり



209袋



1.59×12袋

※25ミクロン=0.025mm

盛り付け例：ソフトけずり

「写真部門」



知事賞

歯磨きたのしいな☆

松本 忠義 (大阪府)

普段は2人とも朝晩の2回歯を磨いてあげているのですが、この日は2人とも自分から「みがくー」と言ってきたので歯ブラシを渡してみると、上手にくわえていい笑顔をくれました。

特別賞

いないいないばあ

清家 綺麗 (愛媛県)

甥っ子がいないいないばあで笑ってくれている写真です。



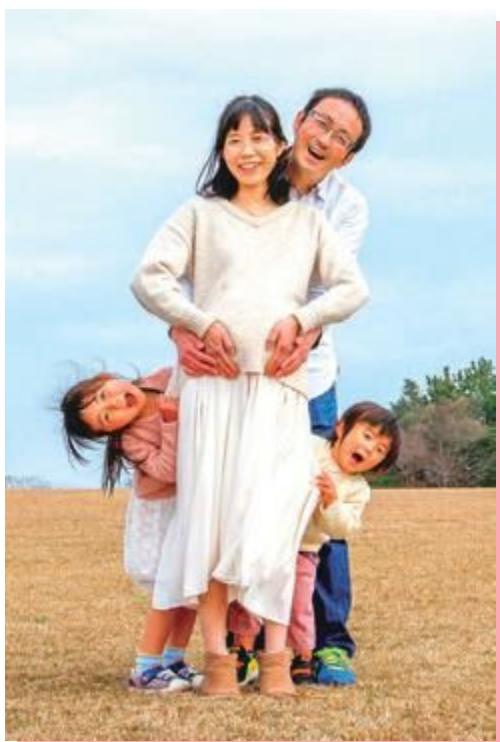
河原学園賞

大好きな君の隣で

大熊 あゆみ (愛媛県)

顔よりも大きなスイカを大好きなお友達の隣で食べながら美味しいねえと微笑み合っていて可愛すぎて写真に残しました。

優 秀 賞



新しい家族楽しみだね

林 良子 (山口県)

3人目の出産を前にして記念撮影でした。家族の笑顔に包まれてきっと楽しいご対面となりそうです。



ピースとかくれんぼ

中川 雄喜 (愛媛県)

孫娘がシロクマのピース君とかくれんぼをして楽しんでいるようでした。

畑が好きな96歳で〜す。

徳永 康人 (和歌山県)

元気の秘密を聞いてみました。毎日、畑仕事を楽しむことだそうです。



入 選



キレイな花だね

須賀 杏奈 (愛媛県)

桜やチューリップ、藤の花、自然に触れて自然と笑顔になった1枚です！



古民家の秋

白石 信夫 (愛媛県)

小春日和古民家の縁側で楽しいまったりとしたひと時



虫取り探検

秋山 叶夢 (愛媛県)

公園で虫取り



ボクだけ起きてるよ

山崎 篤 (愛媛県)

9年前の写真です。もうみんな大きくなって兄弟3人が揃うのは年に1回位。お姉ちゃんとお兄ちゃんは寝たけど、3歳のボクだけ起きていて誇らしげです。



俺の妹

青井 恵 (愛媛県)

双子の妹が生まれて大喜びの息子。今日から俺がお兄ちゃんだぞ。



知事賞

最高の笑顔

福田 優羽（東京都）

今年の夏、カンボジアにボランティアに行きました。その時に会った子供達の最高の笑顔です！

特別賞

WINNER！

乾 颯真（愛知県）

勝てないと言われてた強豪の他クラスに勝つことが出来てみんなこんな笑顔になりました。学校生活最後の球技大会だったのでとても思い出深いです。



河原学園賞

あなたを癒し隊

赤沼 奏空（愛知県）

いつも最前線で、被災地の救助活動や復興支援に取り組んでくださる自衛隊員さんたち。ボクの全力の変顔で、癒してあげたいワン！！



愛媛広告協会賞



親子共演 秋祭り

濱本 秀雄（愛媛県）

3年ぶりの秋祭りにこの愛顔です。父は天狗、中学生の息子は荒獅子の太鼓打ちとして、共に郷土芸能を盛り立て保存伝承を担っています。

愛媛県商工会議所連合会賞



お家カラオケ

神野 朝春（愛媛県）

家で楽しくカラオケをしました

愛媛経済同友会賞



覚えているよ

加藤 陽花（宮城県）

これは私のお母さんと大叔母さま。大叔母さまは最近記憶が曖昧になってきているけれど、私たちはこの時見せてくれたこのとびきりの笑顔をずっと忘れない。

愛媛県IT推進協会賞



わたしの居場所

安藤 野々花（愛知県）

晴れの日も雨の日も暑い日も寒い日も
ずっとわたしの笑顔はここにある。

愛媛県獣医師会賞



いつだって一緒だよ

竹野 陽向子（愛知県）

火縄銃の鉄砲隊の方と微笑ましいワンちゃんを撮影しました。

愛媛県歯科医師会賞



君の記憶には残らないけど

中川 美希（京都県）

両親を見上げる赤ちゃんに、そんな我が子を見て思わず笑みがこぼれている二人の様子が、赤ちゃんの記憶に残らないことが残念なくらいに素敵一枚にしてくれました。

愛媛県理容生活衛生同業組合賞



いつまでも

川井 実咲（神奈川県）

おじいちゃんの誕生日会の写真です。この笑顔、この瞬間がいつまでも続いて欲しいという願いを込めました。

愛媛県情報サービス産業協議会賞



初めてのサイクリング

窪田 宜久（愛媛県）

自転車に乗れるようになった弟と初めてのサイクリング。これから一緒に色々なところに行こうね！



審査委員紹介



イツセー尾形 (審査委員長)

1952年福岡県生まれ。
1982年より現在まで続く「フツの人の日常を描く」一人芝居を開始。
一方で映画にも出演。
2005年「太陽」(アレクサンドル・ソクー

ロフ監督)

2016年「沈黙」(スコセッシ監督)

2021年「ONODA」(アルチュール・アラリ監督)

2022年ハロルド・ピンター作「管理人」(演出 小川絵梨子)

2023年ヤスミナ・レザ作「ART」(演出 小川絵梨子)

TVでは「未解決事件警察庁長官狙撃事件」「スカレット」「ワタシたちはガイジンじゃない!」「青天を衝け」「どうする家康」など多数。

2021年刊行「シェイクスピア・カバーズ」の執筆等幅広く活動中。
一貫して人間賛歌を表現し続けている。



神野 紗希 (審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。
俳人。聖心女子大学講師。
松山東高等学校在学中、俳句甲子園をきっかけに俳句をはじめ。歴代最年少で桂信子賞を受賞するなど、若手俳人のリーダー的存在として活躍。「HAIKU LABO」を立ち上げ、愛媛の観光やものづくりを俳句で発信する。
2019年、「日めくり子規・漱石 俳句でめぐる365日」で第34回愛媛出版文化賞大賞。著書にエッセイ集『もう泣かない電気毛布は裏切らない』など。2020年、最新句集『すみれそよぐ』刊行。



中村 時広 (審査委員)

1960年愛媛県松山市生まれ。
1982年三菱商事株式会社入社。
1987年愛媛県議会議員。
1993年衆議院議員。
1999年愛媛県松山市長。連続3期当選。
2010年愛媛県知事。2022年4選、現在4期目。

写真部門審査協力

愛媛県美術会

同 同

日野 義治

大内 清俊

楠本 真人



表彰式イベントゲスト朗読者紹介



紺野 美沙子

1980年、慶応義塾大学在学中にNHK連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役でデビュー。1987年、日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。

1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、国際協力の分野でも活動中。

2010年秋から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。音楽や影絵や映像など、様々なジャンルのアートと朗読を組み合わせたパフォーマンスを全国各地で公演している。
元祖スー女としても知られ横綱審議委員である。



トワ・エ・モワ

1969年「或る日突然」でデビュー。「空よ」、「誰もいない海」、「虹と雪のバラード」等、次々とヒット曲を放った。

1973年5月に解散、白鳥英美子はソロ活動を開始、芥川澄夫はレコード会社に所属、プロデューサーの道へ進む。

1997年8月、NHK『思い出のメロデー』に「トワエモワ」として出演した事がきっかけとなり25年振りに活動を再開。以後全国各地でのコンサート、テレビ・ラジオ出演等、精力的に活動中。

CD制作ではオリジナル曲の他、日本の抒情歌やフォークソングなど歌い継いでゆきたい楽曲を数多く収録し、コンサートでも好評を得ている。
2011年より、愛媛・伊予観光大使を務めている。

VT
R
出
演



水樹 奈々

愛媛県新居浜市生まれ。
声優・歌手

『NARUTOーナルトー』、『ハートキャッチプリキュア!』、『ONE PIECE』など多数のアニメーション作品に出演。

外画の吹き替えやナレーション、ラジオパーソナリティ、ミュージカルの主演等と多岐に渡り活躍。

アーティストとしても声優史上初のオリコン首位を獲得、NHK紅白歌合戦に6年連続で出場、東京ドームや阪神甲子園球場などスタジアムクラスの公演も成功させる。
第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞大衆芸能部門受賞。

子どもたちの未来のために、 伝えたい想いがあります。

JAバンクえひめでは、食と農業に対する学習や農業体験などを
はじめとした様々なCSR活動を通じて、
自然と調和・共生できる
循環型社会の実現をめざし、地域の皆様の
豊かな未来の実現に取り組んでいます。

JAバンクえひめキャラクター
ぱんじゃくん



JAバンクえひめ

JA うま

JA えひめ未来

JA 周桑

JA おちいまばり

JA 今治立花

JA 松山市

JA えひめ中央

JA 愛媛たいき

JA にしうわ

JA ひがしうわ

JA えひめ南

JA 愛媛県信連



JAバンク えひめ
(愛媛県内JA / 県信連)

「JAバンクえひめ」は、愛媛県内11JAと愛媛県信連の総称です。

JAバンクえひめ

検索

愛^え顔^{がお}感動ものがたり
「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

令和六年二月発行

発行 愛媛県

観光スポーツ文化部文化局

文化振興課

〒七九〇一八五七〇

愛媛県松山市一番町四丁目四一二

TEL (〇八九) 九四七一五五八一

印刷 株式会社 美統

エピソード部門の知事賞作品は、愛媛県出身の声優 水樹奈々さんの朗読に合わせたオリジナル映像をYouTubeで公開しています。

令和4年度 一般の部 知事賞
「秘密の話」 野中紀子

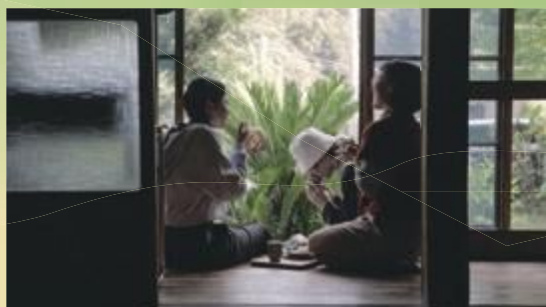


令和4年度 高校生以下の部 知事賞
「憧れの存在」 村井珠夏



愛顔感動ものがたりを原作とした5分以内のショートフィルムを募集する映像化コンテストを実施しています。

令和5年度 グランプリ
「母の分身」 斎藤夏乃葉



令和5年度 準グランプリ
「空気に溺れる」ゆかりとめぐる



愛顔感動ものがたり
公式Instagram

愛顔感動ものがたり

検索

